

第三章

さらなる高みへ

——ラーマクリシュナとしての出発——

寺に戻つて二、三日もすると、ゴダドルは再び強烈な靈的磁氣の暴風にまきこまれた。郷里の村でのおだやかな暮らし、母や身内の人たちや、結婚式をあげたことなどすべてその風にふきとばされ、忘れ去つた。ただ彼の全精神を占領しているものは、「常に、あらゆる場所で大実母を見ていたい」という願ひであつた。昼夜の別なく瞑想し、時には神前で号泣し、裸同然で目を血走らせて境内をうろつく。一般の人の目に狂人とうつつたのは当然である。まさに「神狂い」であつた。

ゴダドルが寺に戻つて間もなく、一八六一年の二月十九日に、寺院の建立者であるラーニ・ラースマニが病没した。ただ一人の遺産執行人となつたマートルは、もう誰に気兼ねもなく、自分の富と真心のありつたけをつくしてゴダドルの世話をするようになる。周囲の人たちが何を言つても一切耳をかさなかつた。

大実母と常に一体であるために障害となるものは何か——その最も大きな障害物は物欲と肉欲であると自覺したゴダドルは、これを克服する決心をした。自分名義になつてゐる少しばかりの財産を放棄し、今後は決して金銭に触れまいという誓いを立てたのである。

「わたしはガンジス河の岸边に坐り、傍にいく枚かのルピー貨と一山の土くれを置いた。そして

右手に二、三枚の貨幣をとり、左手に一つかみの土くれをとり、自分の魂に向かつて言ってきた。『わたしの魂よ、これはカネというものだ。米や野菜を買ったり、家を建てたり、そのほか世間の人が望んでいるいろんなことをする力を持っている。だが、神を見、梵ブラフマンをさとるためには何の役にも立たないものだ。だから土くれと同じものだ』

それから絶えず、金カネは土くれ、金カネは土くれとくりかえしながら、ルピー貨と土を両手で混ぜて、心の中でこの二つの区別を全くなくして、ガンジス河に放りこんだ。まわりにいた人たちがわたしを気狂いだと思ったのも当然のことだよ」

このころ、マトールが、価格千五百ルピーもする黄金で縁どりした肩掛けをゴダドルにかけてやった。彼は最初すこしの間喜んでるように見えたが、次の瞬間これを地面に投げつけ、踏みにじり、ツバをかけ、それで部屋の床を掃除しはじめた。そして言った。

「こういうものは虚栄心を増しこそすれ、神をさとるためには害になる。こんなものはボロと同じだ」

このようにして「物欲を捨てる。金に触れない」という思想は（仏教の戒律でも同じことであるが）真にゴダドルの身についた。後年、彼が眠っているとき、弟子の一人が貨幣を彼の体のそばにおくと、彼の手は曲がり全身が麻痺したようになるのであった。

次に、性欲もやはり妨害であると悟ったゴダドルは、女性はずべて大実母マの顕現あらわれとみなし、

これを一生涯実行し貫徹した。また、カーストに関する偏見の誤りを悟り、バラモンであるという優越性を心から根絶しようとして、賤民の家に行つて、のび放題にのびて乱れている自分の髪の毛で、床の掃除をするというようなことまでもしている。

さらにまた、宗派に対する偏見も誤りであることを悟つた。核心においては、すべての宗派は同じ目的を持つてゐる。ただ利己的な目的のために争つてゐるにすぎない。真理のために熱心なのではなくて、「わが名」「汝の名」の故に熱心なのである。二者は同じ真理を説く。しかしその一方が言う――「あれは真実ではあり得ない。何故なら、その上に私の名の印が押してないから。だから彼の言うことを聞くな」他の一方も同じことを言う。ゴダドルはこの点を反省し、あらゆる宗教宗派の真理は同一であると確信し、後年、これをその教説の根本基調の一つとした。

このことは西洋の宗教家の大部分、ことにキリスト教の人々からは喜ばれない考え方であると思うが、これはラーマクリシュナに限らず、仏陀以来インドの宗教家一般に通ずる考えである。しかもラーマクリシュナの場合は、単に相手の立場を認めるという寛大、ないし見下しの立場からいうのではなく、自己の宗教思想そのものが、謙譲ということに立脚点をおいてゐるのである。

世間の目からは狂人としか見えなくても、ゴダドルの精神はすさまじい速さで向上していた

のである。瞑想しているとき、頭の上によく鳥がとまった。フリダイが見つつけて追わなければ、安心して巣でもつくりそうな気配になるのだ。体の上を、蛇がのんびりと這い回る。まるで樹と同じに思っているのである。いかに完璧に精神集中ができていたかを物語っている。彼は後年その頃のことを回想して、よく弟子や信者たちに話してきかせた――。

「長い間、ほとんど眠らなかつたので、まばたきすることもできず、どんなに努力しても目をとじることができなかった。世間のことはおろか、自分の体のことまですっかり忘れて、月日のたつのもわからなかつた。ほんの時たま、フト我にかえるときがあると、つくづく自分の体を見て、『わたしは氣狂いになつたんじゃないだろうか?』と思つて不安になる。でも、すぐまた心は大実母^マに浸つてしまい、いつそ体なんか邪魔だ、無くなつてしまえばいいと思つたよ。こんなくだらないものにちよつとでも氣をつかうのが阿呆らしくなつた――」

「あのころのわたしの氣狂いっぷりときたら! 友だちがここへきてみたら、わたしは竹の棒をかついでウロついていた。その人は皆に、『ヒヤア、ゴダドルは氣狂いになつてしまった!』と言つたそうだよ。」

カーリー堂のところ、コジキが食べた後の葉皿を、自分の頭や口にくつつけていたものだ。そんなとき、ハラダリが見つけて血相を変えてどなつた。『お前、何てことをする! コジキ

の食い残しを食べたりして！ 子供が結婚する時どうするつもりだ？』と。

わたしは怒ったよ、ハラダリは年上のいとこだが、それがどうした？ かまうものか、わたしは大声で言っちゃった。『従兄にいさんの間ぬけ！ あんたはギターやヴェエダーンタの本を読んだらう？ ブラフマンだけが實在、この世は虚飯こけだって人に説教までしているじゃないか。それに、このわたしが今さら子供を作るなんて想像でもしているのかい！ ギターを誦よむその口に火をつけて灰にしてしまえ！』

ただ学問しただけじゃ何にもならんことがわかったか。楽器の譜を口でよむことは簡単だが、手にとって実際に弾ひくのが大変なんだよ！』（『不滅の言葉』一八八四年九月二十一日より）

「ジャッカルの食い残しを——一晩中、外に出しつ放しになっていたから——蛇なんか口をつけたかもしれないやつを——食べたりしたよ。犬の背中につけて、犬の口もとにルチをあてがつて食べさせて、その残りを自分で食べたりもした。シオルボン、ビシユヌモヨン、ジョゴト（大宇宙ことごとくヴィシユヌなり）——無智無明をなくさない限り、だめだ。だからわたしは、虎になって無明を食いつくした！』（『不滅の言葉』一八八四年九月十九日より）

「体を投げだして祈ったものだよ。大実母マにこう言っちゃ頼んだ——わたしは何も知らない子供だ。あんたがわたしに教えておくれ！ ヴエーダ、ヴェエダーンタ、タントラ、いろんなお経にいったい何を書いてあるのか。

マーは答えてくれた。ヴェーダーンタの根本義は——ブラフマンは真実在、宇宙世界は虚偽。ギーターは十回くりかえして言ってみると核心がわかる。つまり、ターギー（無執着）、ターギーだ。

マーをつかんだとき、ヴェーダもヴェーダーンタも、プラーナもタントラも、どんなに低く見えたことか。そのときはオームをとこなえることもできなかった。どうしてだかわかるか？ 三昧からずーっと低く下ってこないと、オームが発音できないんだよ」（同右）

自分の体に全く無関心になった叔父ゴダドルを、献身的に世話をし命をとりとめておいたのは甥のフリダイである。苦心して食物を叔父の喉の中におしこみ、手を使って排泄させてやった。ゴダドルはただ宇宙の大実母に頼りきり、任せきっていた。

インドには古代から精神統一の方法を組織的に研究した体系がある。仏陀在世当時すなわち西暦前五百年ごろ、この方法の研究が一般に行なわれていて、仏陀自身も、二人の師についてこれを学んだといわれている。その後、仏教をはじめ、各学派各宗派においてそれぞれ研究が続けられ、師資相伝したが、特にパタンジャリを開祖とすると言われているヨーガ派は、この研究および実践を主要な目的とするものである。すなわち、外面的には体の種々の姿勢、呼吸の調整、内面的には精神の集中を実習し、心身の向上高揚をはかるのである。

この派の根本聖典『ヨーガ経』^{スートラ}は、学者の研究によれば五世紀始めころの成立にかかる

言われるが、その資料となっているものは、ずっと古い起源にさかのぼるものが多い。仏教においては、瑜伽^{ヨーガ}、三昧^{サマディ}、禪定^{ディヤナ}を同義語として用いているが、ヨーガ派では、全体の名称として「ヨーガ」を用い、一定以上の段階について「三昧^{サマディ}」ということになっている。

ヨーガを実践する人を「ヨーギ」というが、ヨーギは必ず与えられた道程をとって修行を進めなければならない。一定の秩序を守らず、勝手に先に進むものは、いわば未だ足の慣れない仔牛が新しい草を求めて遠方へ行く場合のように、道を失う危険があるといわれる。故にヨーガを正しく行なうには、適当な師につくことが必要であるとされている。

ヨーガのもう一つの特徴は、それが超自然的な能力をもたらすと信ぜられていることである。ヨーガを完成した人は、たとえば空中を馳^はせるとか、水上を歩くとか、病気を癒すとか、その他のいわゆる神通力を具えるようになると言われる。これもまた、インド人一般の信念となっていて、ヨーガ行者といえば、一種の魔術師であるかのような印象を与えるのも、この面を強調するからに他ならない。しかし、古来、偉大なヨーギと仰がれている聖者は、仏陀をはじめとして、すべてこの不思議な能力を誇示したり濫用したりしなとは言われている。ゴダドル、後のラーマクリシュナも、その一人である。

一八六二年のある日、一人の背の高い美しい婦人が船で来て石段^{ガート}から寺の正面に登ってきた。



カーリー堂の正面ガート

齡は四十前後で髪を長くたらし、赫土色の衣をつけたところから見れば、密教タントラの女行者である。花園で花をつんでいたゴダドルは、この婦人を目みると急いで自室に戻り、フリダイを呼んで、今、寺に着いた女行者をここへ招よんでくるようにと言いつけた。

「わたしの名を言ってお願ひしてくれ。必ずここに來てくれるから……」

フリダイの頼みをきくと、女行者はすぐ部屋にやってきた。そして、ゴダドルの顔を見ると喜びの声をあげ、はらはらと涙を流してこう言う――。

「まあ、私の息子、ここにいたの！ ガンジス河の岸辺の、どこかにいるとは知っていたのですが、ずいぶん、長い間さがしていたんですよ。とうとう会えました！」

どうして自分のことを知っていたのかと、ゴダドルがたずねると、

「ずっと昔、大実母^マが私におっしゃったのです。お前はこれから三人の息子に会って修行を助けなさい、と。二人にはもうとつくに東ベンガルで会いました。最後の一人にここで会ったというわけです」

ゴダドルは彼女の膝もとに慕いより、子供が母に訴えるように、自分が経験しているすべてのことを打ちあけて話し、教えを乞うた。神に精神を集中すると外部の意識を失ってしまうこと。一般の人には見えないさまざまなものが見えること。時どき体が燃えるように感じることに眠れないこと。自分の行動を見て、人びとが気狂いだと言っていること――。

「お母さん、わたしは本当に気狂いになったのでしょうか？ 大実母^マをあまり熱心に求めたので頭の病氣になったのでしょうか？」

女行者は聞き終わると、やさしく、しかも力強く彼をはげましてくれた。

「息子よ、何でお前が気狂いなものですか。そういう世間の人たちの方が本当の気狂いなのです。あの連中は、財産とか名誉とか女とか、くだらない塵芥^{ちりあくた}のために気狂いになっている。はかない幻^{まぼろし}を追いつめているのです。ところがお前は永遠不壊^{とちふこび}の歓喜^{くわんぎ}を求めている。これ以上まともなことはありません。世間の大部分の人たちは愚かなのでお前の境地を理解することができないのです」



境内の北端にあるベルの樹

この女行者はバラモンの出で、名前をヨーゲースワリといって、密教派^{タシトラ}その他の聖典に精通していた。ゴダドルが体験しているのは『信仰の書』のなかでマハーバーヴァ（大恍惚）と説明されているもので、これはクリシヌナの愛人ラーダーと、近世では聖チャイタニヤが経験した神聖な愛の高揚状態であると保証し、彼が苦しんでいた肉体的苦痛も、すべて古^{いにしえ}の聖者の場合と一致すると言って、ヴィシュヌ派の聖典の写本を示して証明してくれた。

インドにおいては事物を論証する場合、古書の権威に訴えることが最も重要な方法の一つである。ゴダドルは彼女を精神的な母として心から信頼し尊敬し、この後、一年余りの間に密教^{タシトラ}の知識を授けられ、ヨーガの実習を指導してもらった。肉体上の違和も、彼女は聖典の指示にしたがって治療してくれた。

心から信頼している女行者ヨーゲースワリから、密教^{タシトラ}の修行をすすめられたとき、ゴダドルはいつものようにカーリー大実母^マに相談する。大実母^マは許可してくれた。パンチャパテイ^{パンチャパテイ}五聖樹の杜で、また境内の北端にあるベルの樹蔭で、彼は熱心に修行し、密教^{タシトラ}六十四種

の奥義を次つぎと究めて行く。この優秀な弟子は、その一つの行法の成果を得るのに三日以上はかからなかった。ヨーゲースワリは、驚嘆し、喜び、満足の目で弟子の進歩を見まもっていた。

この修行法によると、感覚的享樂の対象物を眼前におき、これを神の顯現と見ることによって、感覚的欲望を神への愛にまで高めるのである。したがってこの方法はややもすれば、人を誘惑に陥れ墮落させる危険がある。たとえば、ある種の行法では、師はどこから連れてきたのか、夜中に妙齡のすばらしい美人をゴダドルのところに連れてきて、「さあ、この女を女神として拝みなさい」と命じた。礼拝が終わると、「ひざの上に坐つて、称名ジャバしなさい」と命ずる。

——後年、彼は弟子たちによく話した。「わたしは大実母のお恵みで、幸いにも一度もつまずくことなく、すべての修行を完成したが、お前たちは決してあんな危険な修行をしてはいけない。たいていの人は墮落してしまう」

この派の実習は多くの誘惑の危険を伴い、そのため、しばしばその真意が失われて墮落した教えのように見られがちであるが（左道派）、一方では、絶えずそれを匡正きやうせいして行こうとする努力（右道派）も行われてきた。元来、ベンガル地方には左道派の勢力がさかんであつたから、この女行者ヨーゲースワリも恐らくそれに属していたことと思われる。いずれにせよゴダドルの場合は、幸運な成功と言わなければならない。

「カーリーの性と相さがを知るは誰ぞ　六派の哲学はるかに及ばず」と、讃歌の一節にある「六派

哲学」は、大乘仏教を除いて、インドにおける最も完成した哲学体系であり、インド思想の精髓ともいべきものである。

ミーマンサー派、ヴェーダーンタ派、サンンキヤ派（数論派）、ヨーガ派、ヴァイシェーシカ派（勝論派）、ニヤーヤ派（正理派）の六つのうち、ヨーガ派は他の五派に較べて哲学的に独立した特徴がない。というのは、ヨーガとは修行法であつてそれはウパニシャッド以降、インドの宗教すべてに共通したものだからである。

インド哲学は机上の空論ではない。必ずその哲理を体得具現し、最終目的たる大悟解脱に至るという知行合一主義によつて裏打ちされているのである。ヨーガは正にそのために古来から研究されてきた方法であるから、五感を制し、雑念を除いて瞑想するのが本質である。後世になつて、その道中の副産物にしかすぎない神通力や治病効果のみを宣伝する墮落した行者のため、大そう品位をおとしまつたが、ヨーガはあくまでも身心を清浄にして外界の執着を離れ、人間の最高目的に達するための道順なのである。

ゴダドルは女行者にヨーガの指導を受けると、たちまち熟達して師をしのぐほどになる。女行者は秀れた弟子を持った喜びに浸り、教えるべきものは全部教えた後もカーリー寺に滞在していた。もちろんゴダドルは敬愛をこめて彼女に仕えた。

この修行期間の終わりのころ、ビルボの樹の下で瞑想しているとき、ゴダドルはブラフマヨーニ

(至聖の子宮)を見た——それは巨大な光の三角で、生きて呼吸していた。一呼吸毎に無数の世界を産み出していた。

彼はまた、宇宙全体が梵音オームのひびきを発しているのを聞いた。オームはすべての音の総計である。そしてまた、あらゆる動物の鳴き声の意味を理解することができた。

彼は自分に不思議な力が具わっているのに気づく。その一つは、自ら意志すれば肉体が原子ほども微小になるのである。しかし前にも述べたように、彼はいわゆる「神通力」なるものが、解脱——神と合一するためには百害あつて一益もないことを悟っていたから、こうした能力には全くとりあわなかった。

「法の道はまことにきびしい。欲望が一つでもあると至聖にとどくことはできない。針に糸を通すのに、一つでもケバがあつたらだめだ。ギターのならで、クリシュナ神がアルジュナにおっしゃっている——わたし(神)のところに来ようと思つたら、八大神通力の一つでも持つていてはだめだ、と。

どうしてか、わかるかね？ 神通力などを持つていると、人間は必ず高慢になる。高慢、増上慢、これが神を忘れさせるのだ。超自然能力とか霊能力とか、ああいうものにとらわれていたら、迷妄から脱けることはできない。我執が深まるばかりだ」(『不滅の言葉』より)

密教派タントラの修行が完成すると、ゴダドルはヴィシュヌ派の教義に強くひきつけられるようになった。ヒンドゥー教のなかでもヴィシュヌ派というのは、徹底したバクティ、すなわち神に対する信仰、愛の宗教である。その愛は、召使いの主人に対する関係、友人と友人との関係、子の親に対する関係、親の子に対する関係、妻の夫に対する関係の、五つパンチャバーヴァの態度によってあらわされる。そしてその中でも、妻が夫を愛するように人の魂が神を愛することができるときに、愛の最高点に達するのである。

ヴィシュヌ派では、ヴィシュヌ神の化身クリシュナに対してプリンダーヴァンの森の牧女たちが捧げた愛、ことに、その中の女王の如きラーダーの愛が理想的なものとされ、しばしばこれになぞらえた儀式が行われるが、これには肉欲的関係の考えは毛頭なく、あらゆる肉欲から完全に離れた者でなければ、聖ラーダーと聖クリシュナとの愛を理解することはできないと言われている。そして普通一般人の人々は、情欲の支配をうけているから、その愛について述べた書物を読むことさえ禁ぜられている。

ゴダドルはマトールが用意してくれた見事なサリーを身にまとい、黄金その他の女性用装身具で首、腕、足を飾って、自らラーダーになったと想像し、クリシュナに対して烈しい愛を感じ、その別離の状態を悲しんだ。この期間、口のきき方から身のこなしまで、ゴダドルは全く女になりきってしまう。マトールの邸に行って家族の婦人たちと共に遊んだりおしゃべりをしたり



クリシュナとラーダー

する。そんなときは、毎日起居を共にしているフリダイでさえ、どれが叔父さんか見分けるのに苦労するほどだった。もちろん世間の人たちはありとあらゆる種類の悪口を言ったが、マトールは全くとりあわない。

こうして数カ月の後、ある日ゴダドルはまぎまぎとラーダーの姿を眼前に見た。ラーダーは黄金色の肌と天女のような美貌であられ、そして彼の体の中に消えた。それからは彼はラーダーと同一体であることを感じていた。その数日後、聖クリシュナの姿があらわれて、彼の体の中に入った。この後三カ月の間は、自分自身についても周囲のものについても常にクリシュナの姿だけが見え、宇宙全体がクリシュナであるというヴィシュヌ派の理想を体得したのである。この修行も、ヨーゲースワリの指導に従ったのであった。

こうしてゴダドルは、女行者から学ぶべきものを学びつくしたが、心の底ではなおより高い

真理を求めていた。

宇宙の大実母カーリー女神の愛児ゴダドルは、何ごとにつけても大実母に相談し、大実母に護られ導かれてここまで来た。信仰者は涅槃ニルヴァーナ（寂滅）を欲しない。神を愛し、神の栄光のさまざまな形を見て味わうのを好む。ラームプラサードが言ったように、「私は砂糖にはなりたくない。砂糖をなめて楽しむのが好き」なのだ。しかし大実母はその境地にのみ安住していることは許さず、愛児をきたえるため断崖から突き落とす。

ここにトータプリという名の筋骨たくましい苦行者がいた。パンジャブ州の人である。ヴェーダーンタの哲理を体得すべく、数十年の修行の末、ついに無分別三昧ニルヴィカルパサマデーに入ってブラフマン智を獲得——すなわち大悟解脱した。彼の奉じたのはシャンカラの説く不二元ヴェーダーンタアドヴァイタ哲学で、これによると、宇宙の根本原理ブラフマン（梵）のみが実在であり、世界は迷妄、錯覚にすぎない、そして自己の本性すなわち真我は、根本においてブラフマンと同一である（梵我一如）という。

万有 それによりて生じ
生じたるもの それによりて住し

万有 滅して それに帰す

それ 即ち ブラフマンなり

〔『タイッティリーヤ・ウパニシャッド』三一二〕

「それ 即ち 我なり」というのが、ヴェーダーンタのきまり文句であつて、それを悟るためにこの学派は「否定の道^{ネーティ}」をとる。一名、知識の道とも言う^{ジユニヤナ ヨーガ}。

真実ならぬものを厳密に識別して、徹底的に捨ててゆく。相對世界の一切を否定し放棄し、ぎりぎりのところで、行者の意識は三昧の最高状態である無分別三昧に達し、永遠絶對の實在・智識・歎喜であるブラフマンに溶け入る。時間と空間は一つになつて、誕生と死、原因と結果は夢と消え去る。知るもの、知られるものは円満完全な智慧の大海に流れ入つて一味となる。愛するもの、愛されるものは等しく限りなき歎喜の大洋に溶け去る。

——この三昧に入っている間、その人の肉体と精神とは機能を止め、生命の試験には全く反応しない。傍^{はた}の人から見ると、死体と同じである。無分別三昧を経験した人の意識は、現象の変化にも、苦樂にも、全く反応を示さなくなり、肉体は二十一日で枯葉のように朽ち果てると言われている。「個」であることを卒業してしまつたからである。ただ、人類への特別の使命をもつて生まれた人は、この目もくらむブラフマンの高所から日常の意識へと無事に戻ることができる。この人は人類の靈的向上のために活動する。

トータプリは大悟して以来、風の如く自由に国中を歩きまわり、真摯^{しんし}で素質のある魂を見出すことができれば、自分が獲得したものを伝授しようと心がけていた。背が高く、体も精神も鋼鉄のように強い彼の胸に、ふと一つの希望がわいた。ガンジス河が海に注ぐところで沐浴してみたいと思ったのである。

東インドの聖地を巡拝しながらベンガルに来て、所期の目的を達し、帰る途中、近ごろ評判の高いドッキネーシヨル寺院に立ちよつてみたい気持ちになり、舟に乗つてやつて来た。彼は常に腰布一枚つけただけで他の衣服は一切着ない。決して屋根の下で眠らず、冬でも嵐の日でも樹の下か青天井の下で夜を過す。自分から人に食を乞うことはなく、人々が気ままに布施してくれるものだけで肉体を養い、同じ所に三日以上留まらない、というのが彼の主義であつた。

一八六四年の末ころ、寺院の正面階段^{ガート}を上がつてきたトータプリの眼は、一人の男に注がれた。その辺に大勢いる男たちと同じような格好で、階段の隅にボンヤリ坐っている男である。顔を見た瞬間、この男こそ自分が獲たブラフマン智を伝授する値打ちがある、と直感した。

「ほう！ 密教^{タントラ}ばやりのベンガルにも、これほどの人間がいたのか……」

喜びと驚きにつつまれて、彼はゴダドルに近づき、しげしげと観察した後で声をかけた。

「あんた、いい素質を持っているね。どうだ、ヴェーダーンタの修行をする気はないか？」

ゴダドルは、この背の高いモジャモジャ髪の、裸の男を見上げた。

「わたしは、そういうことをしていいのか悪いのか、わからない。マーが何でも知っている。わたしはマーの言う通りのことをするだけです」

「じゃあ、母親^マのところへ行つて相談してきなさい。早く！ おれは三日しかここにいないからね」

ゴダドルはゆつくり立ち上がつて、カーリー堂に入つて行く。大実母^マは応答^{こた}えた。

「行つて、教えてもらいなさい。あの坊さんは、お前にそれを教えるためにここに來たんだよ」
嬉しそうに承知の返事をする男の顔を見て、トータプリは憐み^{あわれ}の微笑をうかべ、心の中でつぶやいた——「母親^マというのは、カーリーマーの神像のことか……。仕様のないやつだ。無智と迷信——このおれが、すぐ打ちくだいてやるぞ」

ヴェーダーンタの修行をするには、まず正式に出家入門する必要がある。そこで、吉日^{ボク}を卜し、夜が明ける二時間前の吉祥の時間に、五聖樹^{パンチャバティ}の杜にある草葺き小屋の前で聖火^{ホーマ}をたき、その明かりの下で儀式は行われた。

ゴダドルは親のつけてくれた名前を捨て、このときから、ラーマクリシュナという法名に改めた。そして、最高梵^{パラブラマン}に達するために、他のあらゆるものを捨離する誓いの真言^{マントラ}をとええる。肉体を構成する五つの元素——五蘊^{ごうん}を清浄にする真言。体内の五気を浄化する真言。バラモンの印としてつけていた髪束を刈り、聖糸をはずして聖火にくべ、改めて師から出家^{サンニャシ}の印である



パンチャパティ-

ヴェーダーンタの修行をした五聖樹の杜にある草葺き小屋

黄衣と下帯とが授けられる。またさまざまの尊い真言をとнаえて出家入門の式は終了した。こうしてゴダドル改めラーマクリシュナは、一生涯出家として暮らすことになったのである。

インドにおいては、出家となった人は、家庭、財産、カースト、装飾、世俗の仕事、金銭および結婚を放棄する。ラーマクリシュナはこのとき、自分がすでに結婚式をあげてしまったことを完全に忘れていたのである。

師は弟子に究極の真理を授けはじめた。ヴェーダーンタとは奥義書ウパニシャドの別名であって、奥義書を基礎にした哲学である。木村泰賢博士の著書『印度六派哲学』（大法輪閣刊）のなかから、二、三引用してみたい。

「この思想たるや奥義書の精髓を咀嚼し、諸学派の粹を吸集して出来たもので、極めて微妙優秀な点を含み、大乘仏教の教理と相呼応し、ドイツの唯心論系の哲学と氣息を通ずる所があり、優に世界思想史における大偉觀たるを失わぬ」(四五五頁)

「全宇宙を貫通する絶対的生命と吾ら自身の生命とが根底において連なっているという大自覺の上に立つて、しかもそれを生活の上に現わそうとする努力である。故にこの点よりすれば、梵より万有が顕れて来る次第を説くのはただ理論上のことで、實際は寧ろその逆に、万有は梵を最終原因(理想の標的)として、その方に進み行く経過を説いたものと見るところに眞の人生觀上の意義が存すといわねばならぬ。この意義において吾人はタゴールの見解を甚だ面白く思う。

『梵は梵である。彼は完全に対する無窮の理想である。されども吾人は未だ眞にあるべき吾人の地位に到らぬ。吾人は不斷に眞とならねばならぬ。不斷に梵とならねばならぬ。この、あることとなることとの間には愛の無限の奏樂あり。しかしてこの秘密の底に創造の限りなき進行を支えるあらゆる眞と美との根元がある』(The Realisation of Life p.155)

ヴェーダーンタ思想が今なおインドの信仰界を支配し、進んで世界の光となろうとする實際的意義もここにあると解せねばならぬ」(四八八頁)

トータブリはラーマクリシュナに言った。

「ブラフマンは、時間、空間、因果律を超越し、永遠に清浄、永遠に目覚めている唯一の実在である。それは絶対の^{サット}真理・^{チット}智慧・^{アーンダ}歓喜である。これのみがただ一つ実在だ。その他のものはすべて肉体も心も我も迷妄のあらわれである。現象の存在——すべての名と形は無明（本源の無知）の織りなした幻影にすぎない。故に、最高の三昧^{サマーライ}においては、時間、空間、名と形のかげらなりとも感知しない。どんなものでも、いやくも名と形にしばらくは留まっているものは決して真の実在ではない。それを捨てよ。名と形の檻^おを、強き獅子となつて打ち破り、出て来い！ お前の本性である真我^{アトマン}に深く沈潜せよ。そして三昧の中でそれと一つになれ。そのときは名と形で出来ている宇宙は消滅して真空となり、微小なる我は無限大の我に融合する。そしてお前は直ぐに、完全円満なるブラフマンと自分の本性^{アトマン}とが同一であると覺^しるであらう」

ラーマクリシュナは師の指示に従つて、その精神をあらゆる感覚の対象から斥け、自分自身の真空神聖なる本性に集中すべく瞑想の座についた。彼はすぐにすべての事物から精神を切り離す。この程度のこととは彼にとつては簡単であつた。だが……、その先、どんなに努力しても^{無相}の大実在^{アトマン}なる真我（＝梵）に對面することができない。いま一歩というときになると、必ずあの馴染み深いカーリー大実母^マの光り輝く美しい姿があらわれて、ニッコリとほほえむのである。何度かやり直してみても同じであつた。彼はがっかりして師に告白した。

「だめです。わたしには出来ません。どうしても大実母が……」

「なに、出来ない？ バカ！ お前は、するんだ、どうしても、そうするんだ！」

師は近くにおちていたガラスの破片をとりあげ、弟子の眉間につきたて、「それ、ここに精神を集中しろ！」と命じた。その雷のような叫びにはげまされて、こんどは必死の全力をふりしぼって瞑想し、ついに、カーリー大実母の姿があらわれるや智慧の剣をもつて真つ二つに切り裂いた。彼の精神を支えていた最後の足場が無くなり、たちまち彼は、無相の實在の底なき深みに溶け入り——無分別三昧に入った——。

「宇宙は消滅した。空間それ自体がもはや無い。はじめのうちは、思想の影が精神の暗い深みのなかに浮かんでいた。やがてこれも融け去り、あとには我の意識の単調な鼓動が残った。それも止まった。魂はアートマンの中に没した。二元論は消えた——言葉を超え、思想を超えて、二なき一、ブラフマンに到達した」

師のトータプリは四十年の苦行をして、この境地に達した。この師の指導によって、弟子はたった一日で同じ高みに上がった。三日のあいだラーマクリシュナは無分別三昧に入っていた。トータプリは讃嘆し驚愕し、茫然としてこの弟子の、屍のように身動きもしない体を見まもっていた。三日後、師のたすけをかりて、弟子の心は相対界に降りてきた。トータプリは言った——。

「あんたは、もう私の弟子ではない。勝れた友だ」

トータプリは、同じ場所に三日以上は滞在しないのが原則だったが、ドツキネーシヨルのカーリー寺院には十一カ月も留まっていた。そして多くのことをラーマクリシュナから学んだのである。

およそこの二人の見真（神者はまことに対照的であった。トータプリは体も精神も鉄のように強く、天性の智者である。シャンカラの説く正統的ヴェーダーンタの教理が、彼にとっては唯一無上の真理であった。

「真に実在するものは一なる超越意識Ⅱ絶対精神のみであり、これをブラフマンと呼んでも真我アイトマンと言ってもいい。そのほかは、生物も世界も神も一切は存在しない。あるかの如く見えるのは無明（本源的無知）の織りなした迷妄の影である。こういうものについて、ああだこうだとあるかの如く議論するのがそもそも愚かなことなのであって、ただ『消え失せろ！』と一喝すればいいのだ」

だから彼は、情熱とか欲望とかいう迷いのために悩み苦しむ人間に対して、一片の同情も示さない。もちろん、寺の行事や勤行のようなものに何の価値も認めなかった。よけいなことをする暇に、真に実在あるものを見よ。そのまま円満完全にして清浄なる自己の本性に精神を集中せよ！

無分別三昧を通してブラフマン智を体得したラーマクリシュナが、その後もまだ毎日いそいそとカーリー堂に行き、神前で手を拍ちながら称名するのを見て、彼は笑った。

「今さら、何をしているのかね。もういいかげんに、くだらん真似はやめたらどうだ」

だが、ラーマクリシュナは止めない。相変わらず、美しい甘い声で大実母を讃える歌をうたう。彼は導師のトータプリとはちがつて、体もやせて弱く、その精神はまことにデリケートで、わずかなことにも敏感に反応する。彼はカーリー大実母のおかげでブラフマン智を得たのだと信じている。マーが導師をここへよこしてくれ、ヴェーダーンタを習えと言ってくれたのだ。

ラーマクリシュナは無分別三昧によつて、ブラフマンとカーリーが一体であることを大悟したのである。ブラフマンとカーリーすなわち造化力との関係は、「火」と「燃える力」のようなもの。牛乳と、牛乳の白さのようなもの。離れては存在し得ない。蜘蛛は自らの体内から糸を出して網を張り、そこに住んでいる。カーリーは宇宙を吐き出し、また吸い込む。彼女は自ら宇宙となり、あらゆる生物となつて現れ、永遠に遊戯する。彼女の遊戯は、現象は、千差万別一つとして同じものはなく、千変万化一時も休みなく活動している。解脱した魂——見真した聖者でも、肉体を持っているかぎり、わずかでも「我」の意識があるかぎり、この相対界の女帝、カーリーの支配下にある。

トータプリは彼女に宣戦を布告し、正面から闘いをいどんで、征服したつもりである。

ラーマクリシュナは彼女を敵にまわすどころか、味方にし……、いや、母として慕い、尊敬し、讃めたたえ、その無限の美を楽しむ。何もかも捨てて、全身全霊で彼女を愛することによって、彼女と一体になり、ブラフマンに溶けこむ。

本人が詳しく説明しないので如何なる理由がよくわからないが、トータプリは常に身边に炬をたずさえて火を燃やし、神聖なものとして大切にしていた。ある日、この火を傍において彼はラーマクリシュナとヴェーダーンタの哲理について熱心に議論していた。一人の寺男が何気なく近づいてきて、ふとその火を見て無断で燠わきをとりだし、タバコに火をつけた。

「無礼もの！」

トータプリは激怒して寺男になぐりかかる。ラーマクリシュナは腹をかかえて笑い出した。

「そーら、ごらんなさい、先生は現象マヤの力に負けましたよ！　円満完全なブラフマンだけしか実在しないはずでしょう？　先生の大事な火もブラフマンなら寺男もブラフマン。いったい何を怒っているのですか。何が無礼なんですか。あつはつはつ……」

トータプリは意気消沈して自分の非を認めた。

間もなく彼は赤痢にかかってしまう。いままで病氣などしたことはなかったのに、パンジャブ育ちの体には、はじめて滞在するこのベンガルの気候風土は適応の限界をこえていたのであろう。病は日増しに重く、肉体的苦痛のため、どうしてもブラフマンに精神を集中することができない。



ガンジス河より望むドッキネーショナル寺院

トータプリは自分の肉体に対して腹を立てた。解脱した魂にとつては、肉体などあっても無くてもよいのだ。

こう邪魔になつては捨てた方がよろしい。彼は肉体をガンジス河で溺死させようと決心し、河の中へ入っていく……。ところが、どうしたことか河の水はいつまでたつても膝より深くならないのである。向こう岸近くまで歩いて行つて茫然として立ち止まり、ふり返ったときには、この勇ましい大智者はもう、肉体を溺死させようとする意志も力も持たなかった。

このとき、彼はラーマクリシュナの言っていることをはっきりと理解した。彼はブラフマンと造化力（あるいは創造現象）が一つのものであることを認めたのである。その夜、彼は造化力（シャクティ）の権化であるカーリー大実母（マ）を瞑想して過した。

「絶対者の中には汝もなく我もなく神もない。それはあらゆる言語や思想を超越している。しかし、相対性のごく小さな粒でも残っている以上は、言い換えれば、どんなに僅かでも我^{クアヘン}の意識がある間は、絶対者は思想と言語の内部にある。精神の範囲内にある。そしてその精神は宇宙の精神・意識に従属しているのだ。この一切知の宇宙意識が、ラーマクリシュナにとってはカーリー大実母^マであり神なのである」

翌朝、トータプリはラーマクリシュナと共にカーリー堂へ行き、大実母の像の前にひれ伏した。赤痢は洗い流したようにさっぱりと治っていた。彼はベンガルに来て、ラーマクリシュナと十一カ月共に暮らしたことによって、一段と高く明るい境地に達したのである。

一八六五年の末ごろ、トータプリは、もと門人であり、友であり、終いには内心、師とも思っているラーマクリシュナに別れを告げ、自分の旅を続けた。

「実在^{それ}を不動のものとして考えるとき、わたしはそれをブラフマン（梵）と言い、またプルシャ（神我）、無人格的神と名づける。それが創造し、維持し、破壊する——すなわち活動する——と考えるとき、造化力^{シヤクティ}、現象^{マヤー}、またはブラクリティ（原自然、大生命力）、人格的神と名づける。一方なくして他方を考えることはできない。無人格的なものと人格的なものは同じ実在であり、たとえば乳とその白さ、ダイヤモンドとその輝き、蛇とそのうねりのようなもの。宇宙の大実母とブラフマンは一つである」

トータブリが発した後、ラーマクリシュナは自分から進んでブラフマンと合一し、彼の力の極限まで無分別三昧に留まっていた。後年、この時期を回想してこう言っている。

「六カ月の間、わたしはその状態でした。普通の人はそこまで上ると、もう下りて来れない。個人的意識に戻ることはできないのだ。肉体は三週間で朽ち果てる。だが、わたしの体はサットワ分子（純粹な要素）から成りたつてるので、多くの緊張に耐えられる。そのころわたしは外界について全く意識がなかった。まるで死体みたいに、鼻や口の穴に蠅が出入りしていたそうだ。体も髪もホコリまみれで、ひどい有り様だったそうだ」

甥のフリダイが必死になって叔父の体の面倒をみた。無理やり、流動食を喉に流しこむのである。それでも栄養の不足から危うく死ぬところだったが、一番危険なときに一人の修行者が寺にやってきて手伝ってくれた。重い棍棒でなぐりつけて意識を立ち返らせ、その間にいそいで食物を口に押しこむ。この人が三日留まってくれたので助かった。終わりのころになってラーマクリシュナは声をきいた。大実母^マの声なのか、自分の胸から発した悟りの声だったのか――。

「汝はバーヴァムクタに止まるべし！」^{とど}

絶対意識と相対界の境目に心をおいて、ブラフマンを静観することもできるし、また相対世界（この世）の活動にも従事できる境涯をバーヴァムクタと言うのである。間もなく、体は激しい



ケーシャブ・チャンドラ・セン邸でサマーディに入ったラーマクリシュナ
(支えているのは甥のフリダイ)

赤痢にかかった。夜昼なくおそってくる肉体的苦痛のため、彼の精神は次第に下りてきて、やがて常態に復した。

十年にわたる筆舌に尽し難い修行と宗教的経験を乗り越えたラーマクリシュナを、もう誰も気狂いなどとは言わなくなった。世間一般の目にも、正常な人に見えた。体は骨と皮ばかりにやせているが、心は絶えまなくブラフマンの歓喜よつこびに浸っているから、顔はいつも幸福そうに輝いている。俗人の話には耳をかさないが、寺に來る修行者や、出家たちと自ら進んで交わり、話をするようになった。

カーリー寺院の持ち主は、こうした人びとに実によく奉仕サレスしたので、インド中からあらゆる宗派の人びとが入れかわり立ちかわりやってくる。ことに、ラーマクリシュナが無分別三昧を経験したという話が伝わってからは、彼の部屋にはいつも何人かの自称「悟った人」や、ヴェーダーンタの研究者やらが訪ねてきていて、皆でさかんに真理について議論をしていた。話がこんがらがってくると、骨と皮ばかりのラーマクリシュナが、目を輝かせて実に適切な結論を下すのが常であつた。

ヒンドゥー教の範圍において、およそなすべきことをすべて成就したラーマクリシュナは、さらに進んで他の宗教の真理をも体験しようと思うようになった。インドで、ヒンドゥー教に



ラーマクリシュナがイスラム教の修行を行った場所

次いで信者が多いのはイスラム教である。

一八六六年の終わりが、赤痢が治って間もなく、彼はゴヴィンダ・ラーイという名のイスラム教徒を知った。寺の無料宿泊所にはイスラム教の托鉢僧フアキールも時々泊まる。ある日その中の一人の祈禱する姿を見て、ラーマクリシュナはこのイスラム教徒が見真カースト(神)者であることを見抜いた。この人がゴヴィンダである。クシャトリヤの階級カーストに生まれ、ベルシャ語もアラビア語も学んでいた。数種の宗教を勉強した結果、自由簡明なイスラム教の教理に最も心が惹かれ、正式にイスラム教徒となった人である。

ラーマクリシュナは、この人の手引きでイスラム教の修行をはじめた。寺の境内の外に住まい、イスラム教徒風の衣服をまとい、心の中からヒンドゥー教の神々マはもとより、カーリー大実母マさえ追い出して、一日中、アッラーの名をくりかえす。ヒンドゥー教徒にとっては間違っても口にしていけないもの——神聖な獣である牛の肉さえ食べようとする。それを知った保護者のマトールは仰天し、それだけは思い留まってくれと必死にいさめた。彼の清澄な心は、イスラム教思想の奥底にある真理を

映し出すべく、一点に集中する。そして僅か三日の修行で、マホメットに会ったのである。

長い髯^{ひげ}をはやし、おごそかな顔をした光り輝く人物が近づいて来て、彼の中に入ってしまった。ただちにラーマクリシュナはイスラム教の聖典（コーラン）に記述してあるような属性を持つ無形の神を実感し、つづいて無人格的な神、すなわち属性なきブラフマンに沈潜した。このようにしてイスラム教の道もまた、彼が既に不二一元^{アドヴァイタ}ヴェーダーンタの実践によつて到達していた高みへと導いたのである。現在でもヒンドゥー教徒とイスラム教徒は仇敵^{かたき}の間柄に似たような状態だが、ラーマクリシュナの体験したところによると、どちらの宗教から出発しても、その到達点は絶対者、無二、唯一なる者、無差別の最高梵^{ブラフマン}なのである。

これから八年後には、キリスト教についても同じ体験をしている。

「一つの貯水池に、いくつもの水汲場がある。ヒンドゥー教徒はこれらの水汲場で水をくんでジョルと言い、イスラム教徒はこれらの水汲場から水をくんでバーニーと呼び、キリスト教徒はまた別な水汲場からくんでウォーターとよんでいる。また違う水汲場からくんでアキュアと呼んでいる人たちもいる。

名前はちがっても内容^{なかみ}は全く同じもの。

一つの神にいろいろな名前がついている」



ガンジス河に浮かぶ小舟とドッキネーショル寺院

「宇宙の大実母は、子供たちのおなかに合うように料理を作って下さる。みんなの胃袋の消化力は同じじゃないからね」

国（民族）と、時代と、容器（いれもの人の理解力）に
応じて、神さまはいろいろな宗教をおつくりになるということだ」（『不滅の言葉』ゴッムリットより）

この時期のこととして、次のような事件があったと記録されている。

ある日のこと、ラーマクリシュナは寺の正面の浴用階段ガトに立って、前三昧状態でガンジス河を眺めていた。ガートには二せきの小舟ボートがいかりを下ろしていた。何かの理由で両方の舟の船頭が口争いをはじめ、それが次第にひどくなつて、強い方の男が弱い方の男の背をいやというほどなぐりつけた。そのとたん、ラーマクリシュナ

は体に凄^ひい苦痛を感じて悲鳴をあげたのである。

叔父の叫^{こゝろ}び声をききつけてフリダイが飛^とんでき、見るとラーマクリシユナの背中が真^まつ赤になつて腫^はれあがつている。フリダイは激怒して、「叔父さん、どいつです？ 誰^{たれ}がこんなことをしたんです？ 早く教えて下さい、そいつの頭をブチ割^きつてやるから！」と何度^{いくばく}もくりかえして叔父にきいた。少したつて、いくらか苦痛がおさまつてからラーマクリシユナは説明したが、フリダイは「そんなバカなことが……」と呆^{おろ}れて、なかなか信用しなかつたそうである。

「あるときは宇宙が火花で満ちているのを見た。あるときはあたり一面が水銀の入海のようにギラリギラりと輝^{きら}いていた。宇宙全体が銀を溶かしたように見えたこともある。時には全体^{すべて}が松明^{たいまつ}のように炎々と燃えていた。

それから、わたしは、わかつた。あの御方^{テイニ}（神）ご自身が、人間や動物や、この世界にも二十四^{チャトルビンシユタツト}の宇宙原理にもなつていことがね！ 屋根に上がつて、またハシゴづたいに下りてくる。上がつたり、下がつたり！

ウーン！ まア何という境地だつたらう！ 一つの状態が消えると、また別の状態がやつてくる。脱穀機の動きみたいに片方の足が下がると、もう片方の足が上がる。

心が内に向いて——つまり、三昧のときもあの御方を見たが、外の世界に心が向いたときだっ

て、あの御方を見ていた。鏡のこちら側を見ても、あの御方！ 反対側を見てもあの御方だ！」

「世界が虚仮や錯覚であるわけがないだろう？ あれは皆、哲学上のことだ。あの御方に

会ったら生物や世界になっているのはあの御方以外にない、ということがわかる。私^{アマミ}と私^{アママル}のもの^グという気持ちがある間は、すべてはかない幻だが……。

大実母^{ママ}がわたしに見せてくれた——自分がすべてのものになっていることを。ありとあらゆるものが霊（意識に満ちたもの）なんだよ！ 何もかも愛の甘露に浸っているんだ、神像も、水がめも、廊下も、敷石も、何もかも！ サッチダーナンド（真・智・喜）の甘露だ。カーリー堂の前の階段に悪い奴が一人坐っているのを見た——けれど、その人の中にもあの御方の力がギラギラしていたよ」（『不滅^{コタム}の言葉^{リト}』より）